東北女子大学　紀要　No.58：104 ～ 118　2020

舟越保武のダミアン神父像と人権について再考

佐々木史雄*・佐々木　隆**

Reconsideration of Yasutake Funakoshi's statue
of Father Damien and human rights

Fumio SASAKI*・Takashi SASAKI**

Key words : 舟越保武　Yasutake Funakoshi
ダミアン　Damian
崇高　Sublime
人権　human rights
ハンセン病　Leprosy

要　旨

舟越保武の彫刻作品「病醜のダミアン神父像」昭和50年（1975）制作が昭和58年（1983）４月から埼玉県立近代美術館で一般展示された。するとハンセン病の元患者から作品が人権侵害を引き起こすと抗議され撤去が求められた。表現の自由（知る権利・学ぶ権利を含む）を尊重するか、患者及び元患者そして家族が差別されず平穏に暮らす幸福追求権（人権）を守るかが問題になった。

元患者らと美術館と舟越と協議がなされ、作品の鑑賞を希望する者にのみ見られる別室展示となった[1]。平成８年（1996）４月にらい予防法は廃止され、３年後の平成11年（1999）８月から作品名を「ダミアン神父像」と変え一般展示された。

表現の自由（人権）と元患者の人権の対立は原過去の日本政府のハンセン病患者への隔離政策から生まれてきたものである。この政策によって社会は正しいつもりで患者らを差別するようになり、その家族まで迫害を受けたのである。

美術館は作品をただ展示すれば良いのではなく、患者や元患者などを含めた観客に正しく鑑賞できる（知る権利）展示方法や作品紹介を配慮する必要がある。差別意識を生み出す無知と偏見を克服するためにも作品理解の知識を提供しなければならない。作品理解のために、舟越がダミアン神父に感じた崇高な美とは何か、その前提となるキリスト教とハンセン病への理解と問題点、そして舟越の長崎の26聖人像からダミアン神父像までの作品の解釈を行い、ダミアン神父像の表現の意味と作品が隔離された理由を明らかにした。

はじめに　ダミアン神父と舟越保武について

ベルギー出身のダミアン神父（1840－1889以下ダミアンと呼ぶ）は、ハワイから宣教師たちにも敬遠されたモロカイ島のハンセン病の隔離施設へ行き、患者のために重労働を行い、劣悪な生活環境を改善し、身も心も尽くしハンセン病となった[2]。病気のダミアンをモデルにした舟越保武のダミアン神父像（以下ダミアン像と呼ぶ）は、目に見える形の整った外側の綺麗さを超えて、心に見える内面の愛と崇高な美を表わそうとしたものである。

この作品は1983年４月から埼玉近代美術館の一般展示室に置かれたが、ハンセン病の元患者から撤去を求められ、希望者のみ見られる美術館の別室へ移され1984年１月から1999年８月まで置かれた。これは患者と元患者そしてその家族たちが受ける人権侵害[3]を恐れたからである。それは

＊彫刻家
＊＊東北女子大学

岩手県立美術館所蔵ダミアン神父像昭和 50 年（1975 制作）

伝統的にあった差別に加え、対外的な国家の威信のために、国が厳格な強制隔離政策を行い、伝染の恐れを誇大に宣伝したことによる。その結果、社会は患者を以前よりも恐れ差別し排除[4]してきたのである。しかし、ハンセン病はほとんど伝染しない病気で、在宅治療も可能である。それは医学的に知られた事実であり、以前から国内外から隔離政策が人権侵害であると批判されてもきた。特効薬によって治るようになってからも隔離政策は続けられ、患者とその家族たちは人権侵害を受けてきた。この像によって差別意識を呼び起こし、新たな差別を作りだすと不安を抱くのも当然のことであった。しかし、それは必ずしも元患者すべての意見ではなく、元患者の伊波敏男氏の芸術性の評価と撤去反対の意見もあったのである[5]。

問題は国の隔離政策に従事し、人権侵害を気付きうるにもかかわらず、気付かぬままであった医学界やキリスト教会を含めた宗教界の在り方である[6]。そこでダミアン・神父というキリスト教に属する人物への肯定的な評価は、過去のキリスト教会の誤りまでも肯定しかねなかったのである[7]。舟越個人に差別する意思がなくとも、キリスト教の神父の像が作者の手を離れ独立した物となった時、差別をしてきた社会の中では差別のきっかけや差別の容認となる可能性があるのである。

元患者の訴え（過去と現在の差別と将来の差別への不安）によって、埼玉県立近代美術館と話し合いがなされ、舟越も了承の上で別室に移された。その後、1996 年 4 月のらい予防法の廃止や幾つもの裁判において患者側の勝訴となり、権利が回復され、元患者らの状況にある程度の改善がなされた。撤去の要求も撤回され、ダミアン像は再び一般の人の目に触れる所に展示されるようになった。別室展示から 15 年、法律が廃止されてから 3 年も経って再び一般展示がなされるようになったのは、今だに偏見が克服されていないからである。さらに、ダミアン像を別室に置くことは、国の隔離政策を美術館でも同じように行ってしまうことへの反省と作品の芸術性への理解が深まったことがあると思われる。

外側から見える権威や権力そして容姿などで人間を評価し、内側の目には見えない人間性や人格そして愛を評価しないものの見方や感じ方、それらの無知と偏見と自己の優位性を喜ぶ傲慢から差別が生まれてくる。それを改めすべての人を人として平等に認め、人間性を深めるには目に見える

ものの価値を超えた目に見えないものの価値に無知に気付かなければならない。その無知の自覚を促すのが芸術であり、それに相応しく適切に展示し紹介をするのが美術館の社会的な役割である。

芸術への啓発（Enlightenment）について、音楽を例にすれば、鑑賞力をもたず、聴き方も知らなければ、どんな名曲や名演奏も楽しむ事は出来ないであろう。音楽を享受するためには音楽会場や音楽室など環境を整え、音楽への理解を育てる教育的配慮が必要である。幼い頃から、さまざまなメディアで自由に聴けて、学校でも良き指導者から学べれば、音楽の快楽性に止まらぬ芸術性に目覚め、豊かな心が育つであろう。同じことが美術でも言える。ダミアン像に解説を付け、展示の仕方を考えれば、我々は啓発され、感銘を受けるであろう。そうすれば、崇高な美を経験し人間性を高める機会をえられるのである。撤去の抗議の前に美術館がどのような展示をしていたか。ハンセン病について何も知らない観客への配慮をしていたか。場所、他の展示物との関係、照明などによって彫刻作品の受ける印象や理解がまるでちがってくるからである。

別室にダミアン像を置けば、問題は何もないのではなく、作品を通じて知られるはずのダミアンという存在もハンセン病も人権侵害のあった事実も隠されて、存在しなかったのと同じことにされ、問題は忘れられてゆくのである。別室展示されている間、作品の解説と作品が別室に置かれていることをどのくらい告知されたのだろうか。隔離と差別という人権侵害を行ってきた国の政策を意識・無意識に是認してきた我々も反省しなければならない。ダミアン像の持つ批判性が、隠されているならば、同じような無知と偏見による過ちが繰り返されることになる。隠したい、忘れたいことであっても、将来への反省のために、隠したり、忘れたりしてはならないのである。これまでの患者と元患者とその家族の苦労と生きてきた意義と証をなくしてしまってはいけない。芸術作品に内在する崇高な美が感じられないままになるならば、我々は無知の無知なままになり、隔離されたまま亡くなった人々を悼むことさえできなくなるのである。

作品を通じて、真実を謙虚に学ばなければならない。それには我々は事実の観察や言葉の吟味によって美に目覚め、無知と誤りに気付かなければならない。人権侵害に対して、規則を作り法的に抑制するだけではなく、作品との対話を通じて芸術を学び、心を耕すために、ダミアン像自体を改めて理解しなければならない。

ここでは岩手県立美術館の展示と紹介を参考に考察する。一般の市民の目に触れ、ネットでも見ることのできる岩手県立美術館の作品とその解説を前提にして論じる。(本論文は歴史的記述に従って、ハンセン病とらい（癩）病とを使い分け表記した。佐々木の論文（2016）と再考のため重複する所がある。)

1　舟越保武作品について

岩手県立美術館の紹介（2019 年 10 月現在）は 1975（昭和 50）年の作品「ベルギー人のダミアン神父（1840-1889）はホノルルで司祭となるが、1873 年、志願してハンセン病患者が収容されているハワイのモロカイ島に宣教師として赴く。この病を治療する薬のなかった当時、ここに来ることは死を意味していた。神父がどれだけ患者達にいたわりと同情の言葉をかけ熱心に布教活動をしても、この病に罹った者達にとって神父の説教など空々しい。同情と哀れみによって彼らとともに涙を流したとしても、患者でない神父とは限りない隔たりがある。これに悩んでいた神父も 1885 年に同じ病者となり、改めて患者に神の言葉を伝えたという。数年の後ダミアンはこの島で死んだ。舟越保武はこの作品を作るより 10 年ほど前、病に冒された一枚のダミアンの写真に出会う。彼はダミアンの人間愛に気品と崇高なる美しさを感じとり、それが彼の中に 10 年以上も鮮明に焼き付けられていた。できあがったダミアン神父の左眼は病に冒されながらも、右の眼ともども患者の心のなかに深く向けられている」とされている。

ダミアンがモロカイ島へ移った 1873 年は、ハ

ワイに赴任してから10年目で、ノルウェーのアルマウェル・ハンセンがらい菌を発見した年でもあった。[8] ダミアンは患者たちのインフラの改善のみならず、娯楽を与え慰め、子供たちには学校を作った。患者の生活の質は向上し、絶望の中から生きる意味を見出せるようになった。平均余命も伸びたと言われる。しかし、そのやり方について、ハワイ州の行政当局とも教会の上司とも、その間で葛藤があった。つまり、ダミアンの考え方と行動は独自なもので、当時の役所や教会の方針に沿うものではなかったのである。[9]

病めるダミアンの写真に舟越の見た「崇高」とは何か。それは「この人を見よ Ecce homo」と示された驚愕の宗教的な体験ではなかったろうか。利益打算そして快楽を求める日常の体験や感覚を超え、生き方を変えるものであったであろう。

カントは美（Schöne）を実用性など利害関係（関心）から離れたものとし、それを優美（Schönheit）と崇高（Erhaben）に分けた。優美とは感覚にそのまま快をあたえるものとされる。崇高とは人間を圧倒するような巨大な物や嵐のような圧倒的な力を意味するものとされる。崇高は、客観的な物の性質ではなく、人間が人間の尺度を超えるものを認識して、その認識によって改めて対象を崇高なものとして再認識する主観的なものである。だから崇高は対象の中にあるものではなく我々の認識の中にある認識を超えるものである。人間は自らの弱さを認めるがゆえに、自らを圧倒する無自覚な宇宙に対する認識において優位に立つとパスカルは『パンセ』の「人間は考える葦である」[10]と言っている箇所で示している。これは誰でも感じるものではなく、人間としての生き方が自己を超えて崇高なものを感じうる生き方をしているか否かに関係すると思われる。

舟越のダミアンに感じた崇高は、自然の大きさでも威力でもなく、日常的な意識や生き方を超えた存在（神や仏）への敬虔な生き方（信仰と愛）に示される宗教的な崇高である。ハンセン病とそれを取り巻く過酷な社会状況の圧倒的な暴力に絶望することなく希望をもって抵抗する人格化された崇高さである。崇高なものは、当然、日常的な世界の中の安楽で心地よいだけのものではない。それを認識するには崇高を認識できるだけの認識力が求められる。受動的に見てもそのまま分かるというものもあるが、このような芸術の場合、鑑賞者は、能動的に情報を得て、観察し、作品と対話し、味わい、成長する時間が必要である。

崇高の意味には、言葉で語りきれない、目に見えない、聖なるものや畏怖の念が含まれる。畏怖という言葉は畏と怖に分けられる。ダミアン像は病の痛みや苦しさと、それへの恐れと患者たちの国や社会から受けてきた非人間的なさまざまな待遇の恐れを見る者に共感（compassion）させるのである。病める人間を思いやり苦痛を共にするダミアンの極限までの愛への畏れを共感させる。ダミアン像には、そのような苦しみとそれに対し耐え抵抗し生き抜いてきた患者の生と患者を愛し、患者から愛された生を畏敬するダミアン自身の生の両方が内在しているのである。

ダミアンが説教で「あなたたちハンセン病患者は」と呼びかけていたが、自分もハンセン病となり「わたしたちハンセン病患者は」と呼びかけ、心を通わせられるようになったことを喜んだと言われる。[11] マルティン・ブーバーならば、ダミアンがどんなに優しい言葉や、心を尽くし、精神をつくし、力をつくしたとしても「我とそれ」という行政的な福祉事務に対する権利と義務の関係として患者の側からは受け止められていたと言うであろう。それが、患者の側からも受け入れられ「我と汝」の平等で人格的な愛の関係になったのである。それはダミアンがハンセン病になって共に痛みを経験しただけではなく「我」の在り方が変わり「汝」の在り方に応じられるようになったのである。同じ患者の間でも考え方や個性や民族などの違いから共同できないことがあるからだ。病気になったことは重要な要素であるが必要条件であって十分条件ではない。患者の心とダミアンの心が共に変わったのである。それが愛の関係である。ダミアンは司祭として人々の上に立つ立場でありながら人々と対等の友となれたのである。

2　舟越保武について

岩手県立美術館の解説「舟越保武［1912-2002］「大正元年（1912)、現在の岩手県二戸郡一戸町に生まれる。県立盛岡中学校（現・県立盛岡第一高等学校）では、のちの洋画家松本竣介と同期であった。昭和9年東京美術学校彫刻科塑造部に入学。14年新制作派協会彫刻部創立に参加し、会員となる。このころから大理石彫刻を始める。

直彫りによる石彫の第一人者で、25年の第14回新制作派展出品作の《アザレア》は、文部省に買い上げられた。16年郷里盛岡で松本竣介と二人展を開催。二人の交友は、23年の竣介の死まで続く。25年盛岡カトリック教会で洗礼を受ける。33年に着手、37年に完成した《長崎26殉教者記念像》で第5回高村光太郎賞を受賞する。また、島原の乱の舞台となった原城跡で得たイメージをもとに制作した《原の城》では、はじめ頭像を、47年にはすぐれた造形力を示す全身像を完成し、中原悌二郎賞を受賞。同 作は同年ローマ法王庁に贈られ、翌48年これに対し、ローマ法

高山右近昭和39年

原の城昭和39年

原の城昭和46年

LOLLA 昭和47年

王から「大聖グレゴリオ騎士団長」の勲章が授与された。この間、42年東京芸術大学教授に就任、43年には田沢湖に《たつこ像》を、翌年《ダミアン神父》を制作する。52年釧路市の幣舞橋に設置された《道東の四季―春―》で長谷川仁記念賞を受賞。53年には芸術選奨文部大臣賞を受けた。55年東京芸術大学を定年退官。翌年多摩美術大学教授となる。58年、同大退官。61年、東京芸術大学名誉教授となる。62年、脳梗塞に倒れるが、退院後、左手でデッサンを、そして彫刻を始めている。平成11年、文化功労者に選ばれる。平成14年（2002）２月５日、多臓器不全のため逝去。89歳」(2020年２月）である。

大理石の「LOLA」[12]は大変美しく上品である。外国人がモデルであるが日本の女性に通じる雰囲気がある。製作年代を見ると「原の城」とほぼ同じ時期に作られている。ずいぶん違う作品のように見えるが、LOLAは世俗的なものを超越して遥か彼方を見るような眼をして、繊細でありながら毅然とした表情をしている。崇高なるものがここにもある。原の城の死とLOLAの生を制作し、生と死に相通じるものを作者は見ていたのである。

LOLAはカントによれば優美（Schönheit）と分類されるであろう。しかし、単に綺麗であると言うだけではおさまらない、心を浄化するものがある。芸術の持つカタルシス効果である。

舟越は、世間では綺麗と美しいを同じような意味に使うが、綺麗な人と言う場合の意味と美しい人と言う場合の意味が違うと言う。

確かに「綺麗」は表面を問題にし、内面を問わない場合もあり目に見える形の美である。「美しい」は必ずしも目に見えるとは限らない人格的な内面の美を問題にする。なお、行為の道徳的な在り方として綺麗と汚いという言葉があるので、綺麗が内面性を全く問わないわけではない。

舟越の綺麗であり可愛いらしく微笑む少女アンナ（ANNA）を見ていると微笑みがうつって来る。アンナは幼く無垢でさわやかな美しい胸像である。LOLAもアンナもその謙虚な美しさは処女マリアの無垢な聖性に通じる。この処女マリアは亡くなったイエスを抱くピエタ像の悲しみの聖母にもなる。それは与える喜びと慈しみ（優しさ）と受ける苦しみと悲しみという慈悲の心を示す存在である。悲しさと美しさの重なる聖性は長崎の26聖人の像にも通じ、ダミアン像に至るのである。ダミアン像を理解するには、イザヤ書「彼にはわれわれの見るべき姿がなく、威厳もなく、われわれの慕うべき美しさもない」罪無くして受難に苦しむイエスを語るキリスト教の信仰についての解読が必要である。キリスト教とかかわる「原の城」やダミアン像とのつながりを理解する助けになる。だから、カントのように美を優美と崇高に分けることは美を理解するために重要な区分であるが、宗教的な聖性の美についてはカントの無関心な関心としての美の鑑賞では終わらないのである。

舟越が亡くなった２月５日は長崎の26聖人の殉教した日である。臨終に立ち会った長男の舟越桂によれば、ベッドから病室の天井の方をじっと見つめ、ぽろぽろっと涙を流したそうである。まるで26聖人が迎えに来たように見えた。作品が26聖人によって受け入れられたと感じられるような最後だったと言われた。過去の事実を思い起こさせるモニュメントを作る作家として作品自体の芸術的な完成度や依頼者や観客の評価だけではなく、モデルになった崇高な人たちに敬虔な気持で向かい合い、彼らが作品の真実を受け入れてくれることを心にかけていたのである。

３　「26聖人像」から「ダミアン神父像」へ

舟越は教会の依頼によって長崎の26聖人殉教記念碑年昭和37年（1962）を作った。これは慶長元年12月19日（1597年２月５日）豊臣秀吉の命令によって長崎で磔の刑に処された26人の殉教者（martyr・証をする人）たちを記念するものである。舟越は教会から依頼されて作っただけではなく、キリスト教信者としても作ったのである。依頼の内容は、大阪から長崎まで歩かされ磔にされた殉教者の傷つきやつれた無残な姿をそのまま再現するものだった。それは苦難に耐え信

仰を貫いたことを示し、信仰を含めた自由を認めぬ為政者の残酷さを糾弾することでもあったであろう。しかし、残酷さをそのまま描けば、為政者の見せしめの役割も果たしてしまう。そこで舟越は依頼とは異なって信仰を守り殉教した者たちに晴れ着を着せ、敬虔な祈りの姿で昇天してゆく栄光（崇高）の姿に作品化したのである[13]。

26 人は信者一般の一人（one of them）として描かれるのではなく、一人一人の顔や姿や表情を変えて個性と人格を持った掛け替えのない人物（only one）として描きだされている。人間は集団の一員であるだけでなく、個人として尊重されなければならない。多様でありながら全体として調和がとれ統一されているように配置されている。多様な物が生かされる調和は自然の目指すところであり美の要素でもある。

残酷さは為政者への糾弾となるが、信仰を世俗的な政治の問題にしてしまわないか。殉教の苦しみを表現することが人を信仰へと導くものか、かえって恐れて遠ざけはしないか、難しい問題である。そもそも殉教した人々は何を求めて信仰の道を歩んだのか、弱い人間であるがゆえに信仰に基づいて人間として人間らしく良く生きることである。それは世俗のどんな権力のあたえるものをも越えるものである。殉教は我を張ってこの世の権力に死をもって抵抗することではなく、あくまでも教えに忠実であろうとした結果であって、あえて死を目的として選んだものでは無い。殉教の意味を示すためにキリスト教信仰のある人でもない人でも、和洋の文化の違いを超えて、誰にでもわかるように、美しくデフォルメし崇高な姿に理想化して表現したのである。

「高山右近」昭和 39 年（1964）は毅然と立っている姿である。高山右近（1552－1615）は戦国のキリシタン大名で、茶の湯で有名な千利休の弟子であった。彼の洗礼名はジュスト（正しい人）で、茶道の儀礼も敬虔に正しく行うことに努めたであろう。カトリックのミサの儀式との茶の湯の作法が似ていることは知られているが、利休の弟子にキリシタンが多かったことに関係するように思われる。裏千家の口伝には利休もキリシタンであったという説がある。大徳寺の立花大亀老師は「茶の湯は仏事」であると言われ、仏事はキリスト教の宗教儀礼に相当する。茶の湯の儀礼はカトリックのミサとの共通性が認められている。右近の茶の湯も単なる趣味や遊び以上の意味があった。茶道の所作には能に通じる動きがある。能は動く物の中に動かぬ物を表現し、彫刻は動かぬ物に動く物を表現する。舟越は小面の能面に関心を持っていた。能面には表情が無いように見えるが、演じられている時には様々な表情を現わす。高山右近像も鑑賞者が見る位置を変えると表情を変える。右近には織田有楽斎が「清（きよし）の病」があると評したが、敬虔で美しいが儀礼として整いすぎる[14]という意味であろうか。右近の生き方は豊臣と徳川の世を巧みに泳ぎ、生き残った有楽斎の生き方とは正反対の生き方であった。世間の常識に適合するものを健常とすれば、常識を超えた優れたものは病気に見えるであろう。しかし、常識に合わせるだけの生き方は凡庸と化し、さらには悪となる。見方を変えれば、有楽斎の生き方は清くないのである。日本の伝統文化の中にキリスト教という文化が現われた違和感を病気と評することになるが、その病は日常の価値を超える価値に道を拓くのである。「清の病」は右近の毅然とした生き方（崇高）を表する言葉になる。

敬虔な信者として棄教することを拒み、キリシタン国外追放令にしたがって、1614 年にマニラへ行き、1615 年 2 月 5 日に病没した。右近のマントが体全体を占めて、見る人の目が顔に集中する。その顔は正面を向いているが、やや目を伏している。自らの信仰を守ったが、キリスト教へ導いた領民を後に残した。彼らが将来受けるだろう弾圧の苦難を案じているようである。右近の顔に刻まれている皺は傷のような痛みを感じさせる。毅然と立った姿に強い意志が表されるだけではなく、残った人々への憂慮と悲しみがある。衣服が身体を覆い、信仰への情熱を抑え、運命に耐えている。これは不条理なものに対して自由であろうとする人間の生き方を示している。

遠藤周作の『沈黙』が1966年（昭和41）に出版されている。迫害は桃山時代からはじまり、踏み絵は江戸時代を通し明治の初めまで継続する。小説では宣教師が信者の命を救うために踏み絵を踏み棄教する事件が取り上げられている。発表された当時のキリスト教界では否定的な評価が多かった。『沈黙』は世界的なカトリック作家グレアム・グリーンの名作『権力と栄光』というメキシコ革命による教会への迫害と棄教と殉教の話を踏まえて書かれている。有名な作品を下敷きにしていることを意図的に示すような書き方は自分の作品を真面目なキリスト教文学作品として読んで欲しいと言う願いを示している。グリーンからも良い評価を受けている。しかし、当時は必ずしもそうは読まれず、教会から遠藤は批難された。

舟越は『沈黙』を読んで共感していたのではないか。原の城を作る頃、舟越も弱者や敗者が踏み絵を踏み棄教することへの神の受け止める痛みを理解していたと思われる。「原の城」について岩手県立美術館の解説は「島原の乱は、島原や天草の領民が1637（寛永14）年に領主の苛政やキリシタン的動きへの取り締まりに耐えかねて起こした農民一揆。当時すでに廃城になっていた原の城に２万７千の一揆軍は立てこもって応戦。凄惨を極めた戦いの末、10数万の幕府軍に敗れ去り全員殺害された。『その原の城址を舟越保武が訪れたときは、静かな海を背に花々が咲き雲雀鳴く明るい長閑（のどか）な丘であった。かつて凄惨な戦いがあったとは。かえってそこが明るく静かであっただけに、彼には地の底から数万のキリシタンや農民たちの絶望的な鬨（とき）の声が聞こえるようで悲惨な結末が不気味に迫る。』以来、現実と幻想、実像と虚像という、相反する世界を彫刻家は行き来することになった。本丸で討ち死にした兵士が雨上がりの夜に月光を浴び亡霊のように立ち上がる姿を心に描く。現実と幻想のあいだを浮遊する像、ときに現れときに消える。彫刻という実体のあるものよって幻覚のようなものを作りだそうとした。これができて彫刻家は原の城の幻影から解放された。」（2020年２月）と舟越の文章を引用して書かれている。[15]

全身像「原の城」昭和46年（1971）という作品は、これまでの26聖人の像のような理想化され晴れやかな毅然とした栄光の姿ではなく、苦しみ悩みつづける敗者の姿である。戦ってはいけないと言う教えを破って戦うことは、踏んではいけない踏み絵を踏むことに通じる。島原の乱で、戦いに敗れて亡くなった人々の代表として、無名の兵士が月光の中に土の中から立ち上がる亡霊の姿（魂）のイメージが示されている。

最初に兜をかぶった頭部の作品昭和39年（1964）ができ、次に全身像の作品が７年後（昭和46年）に出来上がる[16]。立像の腰の部分に「いえずす」「さんたまりあ」そして「歿」と書かれている。彼がキリスト教徒として亡くなっていることを示している。頭部の作品「原の城」の目は伏しながら虚しく見開き口からは苦しいうめきが聞こえてくる。殺すなかれという教えにもかかわらず戦って敵を殺し、自分も殺された、これで良かったのか良くなかったのか、戦いの虚しさを問い続けるようである。だから、それから全身像が作られたとき、当然格好の良い勇ましいもの（綺麗なもの）ではなく、前かがみの今にも倒れそうな姿になった。この身体の傾きはダミアンの傾きにも通じる。ダミアン像は藏座江美氏によれば見た目よりも重いと言う。重心を保つために重くしてあるのである。そこに魂の実体（存在の重さ）が内在している。全身像は頭像とは顔の表情や兜の形が少し違っている。見る位置と角度が変わるからである。さらに全身は神に尋ね、許しを請い、神の答えを聴こうとしているようである。頭像の問いをさらに全身は深めているのである。この像が代表する人々は戦いに参加し、防衛のためであっても人を殺したので、宗教的には26聖人のように殉教とは認められない。世俗的には敗戦したので戦った意味がないことになる。救いはないのだろうか？

光の当て方で頭像は金色に輝いて見える。この全身像の灰色の彫刻も上から月光に照らされる姿を思い描くと、レンブラントの人物のように神か

らの光を浴びて銀色に輝くように（美しく）感じられる。世俗の評価を超え、教会の教えや掟を超えて、『沈黙』における神のように、神は人々の苦悩を受け入れているのである。

彫刻の人物は我々と共に我々の中に存在している。演劇の臨場感に通じる。無表情のように見える能面も役者が物語に従って演技でしぐさや顔の角度を変えると喜びや悲しみが表現される。それに対し彫刻は、我々が彫刻の周りを歩き動くことで、位置や角度が変わり形も変わる。我々の思い描く物語に従って表情を変化させるのである。ダミアン像の場合も彼の人生を知れば悲惨と栄光が現れてくる。見る人の角度や位置が変わると、形が変わり、表情が変わり、心が受け止める物語が展開するのである。

ダミアン像昭和50年（1975）は、教会などから依頼を受けて制作したものではなく、舟越が小田部胤明の『ダミアン神父』を読んだのをきっかけに制作されたものである。作品は健常者であった頃の理想に燃えた若きダミアンではなく、晩年の病み衰えたダミアンであり、（綺麗な）理想化はされていない。傷ついた兵士を描いた「原の城」との連続性がある。舟越は外から見えるものを超えた、心に崇高なもの（美しさ・聖なるもの）を感じ取ったのである。「26聖人」「高山右近」「原の城」を経て「ダミアン像」に至るまで舟越の表現が変わったように信仰も作者の在り方と考え方に応じて変化し深化していったのである。社会的な背景として昭和29年（1954）から昭和48年（1973）までの高度経済成長の終わる時期であり華やかな繁栄に対する批判や反省がある[17]。

ダミアンの制作の順序は、健康だった頃の綺麗な姿をまず作り、それを病める姿へと変えた。[18] ダミアンがダミアンでありながら変わってゆくことを追体験したのである。それは舟越も助手も悲痛な思いであったという。作品は初め柔らかな粘土である。ダミアン像の手に触れ、ダミアン像からダミアンの身体に触れたような感覚を持ったであろう。そのダミアンは患者に触れ、患者と手と手を握り支えあう手となった。そしてダミアンの手もダミアン像の手も患者の手となったのである。彫刻はただ見るだけの視覚的なものに留まるのではなく、触覚的なものなのである。[19]

ハンセン病は「らい病」と呼ばれていた。国はこれまでのらい予防法昭和28年（1953）制定を廃止し、平成8年（1996）、それに関連する強制隔離政策の非を認めた。しかし、それですべてが解決し変わったわけではない。明治40年（1907）に「癩予防ニ関スル件」が制定されて以来の影響が残っているからである。ハンセン病患者に対する偏見と差別のあった精神風土は急には変われない。宿泊拒否事件があり、そのことへの抗議への偏見に満ちた元患者を非難する反抗議が行われた。令和元年（2019）ハンセン病家族訴訟も原告の多くが匿名で行われなければならなかった。

ダミアン神父像の最初の題名は「病醜のダミアン神父」であった。[20] それが「ダミアン神父」と表示されるようになった。変更は深い配慮によるものであろうが、キリスト教の視点からみると、最初の「病醜」の命名には「病」というものに苦しむすべての人々の痛みと悲しみへの共感が込められている。キリスト教では全能の善なる神が世界を創造したのに、なぜ人々は苦しむのか、なぜ悪があるのかということが問題（弁神論）になる。それが聖書のヨブ記にあると言われる。何の罪も咎もなかった正しい人ヨブが信仰を試され苦難を味わうのである。ヨブは、自らの責任ではなく財産を失い、家族を失い、そして重い皮膚病（これがらい病と言われてきた）となる。この神の不条理な試練に対するヨブの抗議が述べられる。自分でも家族の過ちでもなく、苦難を受けるのはなぜかと問う。ヨブを見舞いに来てくれた友人たちとの議論がなされる。生真面目な友人たちが一旦は同情しても事実を知らぬまま、一連の不幸や病をすべてヨブの自己責任としての罰であると非難し攻撃するのである。同じようにダミアンがハンセン病になったのは、ダミアンの不行跡の結果であると非難した牧師がいたのである。[21]

それに対してヨブは徹底的に反論する。苦難を容認しない、受けるべきものを受けているとは認

めない。ハンセン病の姿に、イザヤ書にある面影もなく傷ついた「苦難の僕」の姿を重ね合わせ、何故苦しみが存在するのか、「わが神、わが神、見捨てたもうか」というイエスの糾弾の問いを含む祈りを読み取れるのである[22]。贖罪はイエスがすべて果たしているので、さらに人が行う必要はない。「醜」はダミアンの自らに感じている痛みと苦しみを指している。このことを直観的に理解できる人もあるかもしれないが、我々は宗教芸術と前提しなければ、理解できないだろう。だから「醜」とはヨブと同じように罪の結果の穢れの意味ではない。舟越はハンセン病患者への差別や偏見する側にはいない。道徳的に罪がないのに処刑された26聖人や日本の社会から追放された高山右近、そして島原の乱で殺された人々、少数者や差別される側に舟越はすでにいたからである。

作者の美術上のデフォルメとは何かという問いかけがある。デフォルメは作者の意図を強調するための変形であるが、この作品のデフォルメとしての醜は、共に痛みを分かつ（compassion）経験のためであり、綺麗さや快適さを重んじる世俗性を超越する形を超え形、宗教的崇高さ、聖なるものを表現するためである。語りえぬものを語るには逆説的な表現をせざるをえなかった。26聖人や高山右近や原の城では描けなかったさらなる真実を舟越は表現しようとしたのである。

４　ハンセン病とキリスト教と聖書

荒井英子の『ハンセン病とキリスト教』は日本のキリスト教会が隔離を認め無らい県運動に協力していた事実を示した。善意であっても、自分が何をやっているのか、その善意を施される人にとって、それが本当に良いことかどうか、自分も相手も、お互いにとって本当に善いことかどうか、対話し吟味しなければならないことが反省される。

舟越が芸術的な表現の自由を主張して元患者の主張を拒否せず、展示の制限を受け入れたのは謙虚な反省である。その抗議が撤回されたのは差別される側が差別する側の眼差しを受け入れてしまったこと[23]に気付いたからではないだろうか。

ダミアンも舟越も読んだ聖書ではΛέπρα をLeprosy、らい病と訳していた。新共同訳では重い皮膚病と訳され、最新訳では「規定の病」とされた。共同訳でもらい病と訳され、新共同訳が出るまでは「らい」の言葉が使われ、田川建三は歴史的な言葉として癩病とそのまま訳している。[24]ヘブライ語のツァラアトとは皮膚病一般のことであって、聖書に規定の病と書かれた病はらい病ではなかったという説が最近は有力である。しかし、新約聖書はギリシア語で書かれているのでツァラアトとそのまま結びつくであろうか。イエスが患者に関する規定を破ってでも病気を癒したことが、不治の病を治したという以上に、ユダヤ教の権威や規則による差別を超えたことへの驚きだった。それはユダヤ教からキリスト教への飛躍であった。

らい病という言葉が不愉快にさせるのは、言葉よりも、偏見や差別を「規定」や習俗によって人権侵害なされるからである。言葉の言い換えは差別する人たちの意識を変える条件の一つにすぎない。何よりも正しい事実認識をして、ダミアンの業績を知り、ハンセン病がほとんど伝染しないこと、治療が可能という医学的な知識を、共有することが必要である。不利益な扱い、肉体的・精神的・社会的な苦痛を除くには、隔離政策のような制度的な差別を改め、認識の誤りや誤解を質し、人権意識を育てなければならないのである。

らい病を「規定の病」と言い換えて差別が改善してゆくならば良いが、戦後、憲法は法の下の平等など人権規定と言葉を変えたが、ハンセン病患者を含めたすべての人の人権が認められるようにはならなかった。らい病からハンセン病に名称が変わっても、国の隔離政策は近年まで維持され、人々の偏見も克服されなかった。

旧約聖書のレビ記13にらい病に関する規定がある。イエスは治癒の後に元患者に規定（祭司に体の状態をみせること）に従わせた。マルコ福音書1章40節～45節。イエスが治したことについては沈黙させ、元患者を規定に従わせたのは、元

患者を平穏に社会復帰させるためであろう。

ヨハネ福音書は冒頭に神の受肉の話から復活したイエスの傷に触ろうとする話まであるのに、このらい病治癒の奇跡について全く触れてない。しかし、後世の伝承ではヨハネ福音書に描かれた復活したラザロがらい病だったという伝説からラザロにちなむキリスト教組織がらい病患者の看護に当たっていたと言われる。[25] そのような看護の思想が明治初期に外国人宣教師による日本のらい病患者の施設の設立へ導いたと思われる。肉体的に傷つき、社会的に追放され、絶望の闇の中にいることに対して、「光は闇の中で輝いている」という言葉がある。パウロの「光の子」となりなさいという言葉は闇を照らし共に生きることを命じているのである。[26] 割礼という肉体にかかわる言葉が出てくるパウロの書簡にもらい病の言葉はない。信仰、希望、愛のうち最も優れているのは愛であると言っているので、らい病患者への差別なき愛の働きで特別視しなかったのかもしれない。

ユダヤ教の一派がキリスト教という新しい宗教としてユダヤ教の律法や組織から離れ独立しようとしていた。パウロやヨハネ福音書の立場から、ユダヤ教への回帰をさせないために、そのことを語ることをさけたのか、罪による汚れという考え方を否定し、ユダヤ教の祭司に見せることを不要と考えたように思われる[27]。

教会は組織として、隣人愛や自然法に基づく人権思想の浸透から、らい病患者を受け入れる根拠として後世のラザロの伝説を受け入れたのであろう。らい病は中世の西欧社会で必ずしも受け入れられていたのではない。レビ記の規定の影響を受けた差別を行っていた。今日の人権がすべての人に同じように理解されているのではないように、聖書も教会や信者に同じように理解されているわけではない。だから、新約聖書からインスピレーションを受けてダミアンは独自にイエスとらい病患者との出会いに倣って、ハンセン病患者と接し、その人を癒し、人間としての生活を取り戻すことを考えたのである。ハワイ州で強制隔離政策が始められた時に教会は自らの方針を持っていなかったと思われる。つまり、当局の方針に従ったのである。ここにダミアンとの摩擦の原因がある。[28] ダミアンをキリスト教会制度の枠の中で理解したり批判したりするのは誤解である。それは『沈黙』の遠藤[29]も『ダミアン像』の舟越も同じである。

明治からの日本の教会の限界は、近代的な人権意識が信仰と共に育てられず、ラザロにちなむ組織の伝統もなかった。国の発展のための国策としての隔離政策にやすやすと協力することになった。キリシタン禁令や廃仏毀釈運動そして自由民権運動の弾圧のあった社会では、宗教指導者は国家と妥協し組織を維持する方向へ向かわざるをえなかったようである。荒井の言うように、教会は信仰としては人間的な憐れみを向けながらも、組織としては国のハンセン病患者への隔離と排除の政策を支持したのである。戦争中は教会が弾圧されて政策への抵抗どころではなかったとしても、戦後も差別を続ける政府の政策に無自覚なままであったことは問題である。

5　近代日本のハンセン病の隔離政策

キリスト教の宣教師であったコーンウォール・リーやハンナ・リデルは施設を作り、路上や神社仏閣などで乞食をしていた人々を救い人間として扱おうとした。リデルの手紙にはダミアン神父の名前がでてくる。[30] ハンセン病患者のための待遇改善のための資金の募集を求め世界に発信していた。リーやリデルたちの作った施設は修道院のようではあったが、比較的開放的で自由なものであった。後に国策で施設は閉鎖され、国のために患者を隔離する自由のない施設へと質的に異なるものへ変わった。[31]

国の政策は療養と言うよりも人の目に触れぬところへ患者を排除し監禁するものであった。初期の施設は警察が監督し職員にも警官がいるなど、外からは完全に隔離され交流が遮断され内部の情報も伝わらなかった。患者に外と交流させないために施設内部でのみ有効な通貨まで作られた。施設では王道楽土が実践されていると現実とは異な

る宣伝がなされていたのである。

ハンセン病患者のいない欧米に対して患者のいることを日本の恥として、らい病患者を隠すために隔離し、日本からなくそうと無らい県運動が全国で行われた。そのために恐ろしい伝染病という恐怖心を掻き立てる宣伝がなされ、政府による患者探しが路上生活者だけではなく家で暮らす者にも行われた。国の建前は患者の救済であったが、施設に入れば一生出られない、本音は社会から抹殺する民族浄化運動であった。患者同士の結婚はその条件として断種手術が行われ、妊娠した場合には中絶が強制された。医療施設と言うには不衛生で栄養も不十分な収容施設だった。

ダミアンは役人とも衝突しながら患者の生活条件（QOL）を向上させた。治療薬のない時代に死亡者の数を減らし平均余命を伸ばすことになった。ダミアンは人間らしい暮らしを少しでも可能にし人々に希望を持てるようにしたからである。

日本のハンセン病の隔離政策は特効薬ができてからも続いた。その政策の中心人物が救らいの父と呼ばれる光田健輔であった。隔離政策を批判した太田正雄や小笠原登などの反対意見は否定された。小笠原は所属する浄土真宗の組織から無視されたが、ハンセン病を重い皮膚病と偽って、患者を隔離政策から守ったことが知られている。

このような光田を心から尊敬し隔離政策を支持したのが神谷美恵子で、彼女は初め太田正雄の弟子であったので批判は知っていた。同じ光田の弟子でも犀川一夫は隔離政策に反対した。神谷は精神病患者の隔離を批判したミシェル・フーコーに会いその説も知り、その著書を翻訳している。フーコーに日本の遅れた医療状況と患者の隔離の不完全を弁明して、彼を当惑させた。神谷はフーコーを患者と接する現場の精神科医ではなく、治療の現場を外から眺める哲学者に過ぎないと批判した。神谷は海外経験もありハンセン病の海外の事情も知っていたが日本独自のハンセン病患者の厳しい隔離を是認した。その枠の中での生を肯定し、人生の充実を彼女の『生きがいについて』は提唱したのである。神谷は患者に対しては慈母のように接したが、施設への待遇改善の要求や解放を訴えた患者の存在については全く触れず、人権侵害を黙認した。それは母性の持つ保守性によるものではなかったか。神谷の誤りを指摘せず賛美する伝記は、過去の隔離主義まで肯定することになる。日本のハンセン病にかかわる行政は、光田の影響のもとに、隔離政策を続け、無菌となった元患者の社会復帰のための社会的な啓発も行わなかった。現在、元患者の平均年齢が85歳である。今伝えておかなければ、過去にどんな誤ったことが行われたのか反省のための記憶が失われてしまう。ダミアン像の撤去から再展示への過程は苦難の歴史を示すものであるので、作品の解説に加えるべきであろう。

6　神谷美恵子の問題は我々の問題

ダミアン像への共感が生まれれば、差別や病に対する恐れと苦痛と困難の中で共に生きようとするようになるだろう。崇高なものへの畏敬によって、日常の中でまどろんでいる我々は覚醒へと導かれ、我々は我々自身の大切なことへの無知に気付かない無知に気付かされることになる。

隔離政策について問題点を指摘され、外国の在宅治療についても知っていた。にもかかわらず光田や神谷のような人たちは、患者の非人間的な扱いを見ても、人権の意識を持たず非人間的であることに無知であったのである。それ故、国のハンセン病対策について反省も批判もできなかった。

慈母とか聖女のようだと賛美される神谷はダミアンとは逆の立場にあると思われる。神谷は隔離と断種と中絶を実践していた光田を生涯尊敬していたのである。光田は臨終に際し、キリスト教の洗礼を受けたがその霊名はダミアノ、即ち、ダミアンである。教会とダミアンの名を忌まわしいものとしたのである。

神谷は戦後の日本の外交交渉における文章の翻訳に携わった。内容は極秘事項だったとしても、戦前の日本の在り方や人権問題への批判を反省的に読まなかったのか。日本語よりもフランス語の方が堪能と言う神谷は日本人としてのアイデン

ティティを国家と一体化（滅私奉公）することで得ていたのではないか。

彼女の父親前田多門は新渡戸稲造の門下生であり内村鑑三の聖書研究会に参加した人物で、兄の前田陽一はパスカルの研究家である。彼女はスイスの学校で学びキリスト教のことを幼いころから知らされていたが敬遠していた[32]。父は東京市の助役や文部大臣であった。その環境から、神谷は上の地位に立つ人間の下へのまなざしを持ったのではないか。国策をいかに効率的・効果的に遂行するかは考えても、国策自体に疑問を持つことはなかったのだろう。支配される側の思いに無知であることに無知であることが思考の枠組みとして固定されていたのである。K・レーヴィットが「日本人は西洋の哲学について実によく知っている。しかし、その哲学によって自己と自己の文化への省察を行っていない」という批判は文化に関して彼女にも我々にもあてはまるであろう。差別の背後にある「恥の文化」への反省が必要である。森貞彦によれば我々は『菊と刀』が読めていないという。

神谷は与えられた環境の枠の中で懸命に生きる個人のことを考察する。社会的な隔離を考慮から外す。ローマ皇帝マルクス・アウレリウスの自省録を翻訳している。アウレリウスは禁欲主義で知られているストア派の哲学者である。神谷はローマ帝国の体制を守りキリスト教を迫害したことに触れていない。自省録の翻訳で、彼女は同じ言葉を読みやすいように言い換えて訳した。しかし、荻野弘之によればアウレリウスは同じ言葉を自分自身の反省の規範・尺度となるように意識的に使っていたという。意識的に同じ言葉を使っていたことを読者への彼女の善意あるいは忖度によって分からなくしていたのである。「地獄への道は善意によって舗装されている」というが、それは彼女個人の問題だけでなく、我々の問題でもある。ダミアン像の展示制限の反省にも言えるであろう。ダミアンも舟越も遠藤も過去の教会の中にいるが必ずしも教会と同じではないことを知り、ハンセン病の知識と展示への配慮があれば、より良い鑑賞が可能になるのではないか。

参考文献

小田部胤明『ダミアン神父』改訂版中央出版社 1993 年

小田部胤久「西洋美学史」東京大学出版会 2009 年

渡辺二郎「芸術の哲学」放送大学教材 1993 年

舟越保武『巨石と花びら』筑摩書房 1982 年

三宅一志『差別者のボクに捧げる！』晩聲社 1981 年

カール・レーヴィット『ナチズムと私の生活』法政大学出版局 1991 年

神谷美恵子「生きがいについて」みすず書房 1980 年

神谷美恵子「人間をみつめて」みすず書房 1980 年

神谷美恵子「本、そして人」みすず書房 2005 年

江尻美穂子「神谷美恵子」清水書院 1995 年

大谷美和子「神谷美恵子―ハンセン病と歩んだ命の道程」くもん出版 2012 年

荒井英子『ハンセン病とキリスト教』岩波書店 1996 年

荒井英子『弱さを絆に』教文館 2011 年

武田徹『隔離という病』講談社 1997 年

ハンセン病と人権を考える会『ハンセン病と人権』解放出版社 2000 年

宮坂道夫『ハンセン病重監房の記録』集英社 2006 年

伊波敏男『ハンセン病を生きて』岩波書店 2007 年

伊波敏男『花に逢はん』NHK 出版 1997 年

伊波敏男ハンセン病を生きる①② https://bit.ly/375NoiC

荻野弘之『マルクス・アウレリウス「自省録」―精神の城塞』岩波書店 2009 年

大野哲夫『ハンセン病講義』現代書館 2013 年

ドリアン助川『あん』ポプラ社 2015 年

高木智子『隔離の記憶』彩流社 2015 年

木村功「病の言語表現」和泉選書 2016 年

森川恭剛『ハンセン病と平等の法理』法律文化社 2012 年

鈴木禎一『ハンセン病―人間回復へのたたかい:神谷美恵子氏の認識について』岩波出版サービスセンター（製作）2003 年

佐々木隆「舟越保武のダミアン神父像をどのように理解すればいいのか」上智人間学紀要（46）2016

佐々木隆「いじめの一起源とヨブ記の人権教育論的考察」東北女子大学・東北女子短期大学紀要（56）2018

日本のハンセン病問題 https://bit.ly/2Nj7m0k

ハンナ・リデル https://bit.ly/2pkHLfh

コーンウォール・リー https://bit.ly/31Oc6QF
コーンウォール・リー女史ネット・ミュージアム https://bit.ly/31Oc6QF
ハンセン病政策の変遷―わが国におけるハンセン病差別の生成過程―中田暁子日本のハンセン病問題 https://bit.ly/2Nj7m0k
ハンナ・リデル https://bit.ly/2pkHLfh
コーンウォール・リー https://bit.ly/31Oc6QF
コーンウォール・リー女史ネット・ミュージアム https://bit.ly/31Oc6QF
厚生労働省「わたしたちにできること」何もしないでいることの過ち https://bit.ly/36bNDIw
小杉世『ウルフと精神医学:神谷美恵子とM・フーコーとの関連において』https://bit.ly/36dMLmv
ヴァージニア・ウルフ研究 15（0）, 1-15, 1998 日本ヴァージニア・ウルフ協会
田中真美『神谷美恵子と長島愛生園:ハンセン病から精神医学へ』立命館大学大学院先端総合学術研究科 2013「「10 月 30 日島行き.高島重孝園長と初対面。エネルギッシュな感じ。精神病者がらいの治療も精神病の治療もうけずに放置され、不潔な状態におかれているのは、国辱ですね。（神谷 1980: 195）[33] https://www.r-gscefs.jp/pdf/ce09/tm01.pdf
田中裕　歴程日誌―創造的無と統合的経験―神谷美恵子について「全国ハンセン病患者協議会元事務局長の鈴木禎一さんの近著「ハンセン病―人間回復へのたたかい―神谷美恵子氏の認識について」（岩波出版サービスセンター 2003）は、このような神谷美恵子の考え方を含めて、光田イズムを、強制収容された入所者の視点から批判したものであるが、それは、基本的には、松本馨さんの「らい予防法に抗する闘い」と同じく、安直な歴史的な相対主義にたつことなく、戦前戦後の日本の「救癩」政策の主流を形成してきた「光田イズム」に対する根源的な批判である。私は鈴木さんの本から、多くのことを教えられた。強制収容された当事者自身から為された、このような批判を踏まえて、今一度、神谷美恵子の思想と実践を、再検討することが必要であろう。たんにハンセン病の問題だけでなく、神谷自身の精神医療に対する考え方、さらに一般的にはごく最近まで日本の精神医療に存在していた人権抑圧の問題点に対しても、同時に検討しなければなるまい」https://bit.ly/32SXZuO
同「復生の文学」彼方からの声東京大学出版会 2007 年[34]
新田さやか 2018 年度立教大学博士学位論文ハンセン病者の当事者性とその不在化の様相に関する研究―隔離政策の変遷を時間軸としてhttps://bit.ly/2NXimAH
森貞彦「「菊と刀」再発見」東京図書出版会 2002 年

---

1 舟越保武《病醜のダミアン》を展示しないという決断前山裕司aicaJAPAN NEWS LETTER ウェブ版第 6 号美術評論家連盟会 2016 年 https://bit.ly/332zpb7
美醜を超える芸術の力についてOn Leprosy and Fine Arts池田光穂 https://bit.ly/31RqLdR

2 ベルギーとハワイの風土の違い、過労で免疫力が落ちていたので、罹病したのではないか。

3 ハンセン病家族補償法が 2019 年 11 月 15 日成立

4 無癩県運動は、1930 年代から 1960 年代にかけて、癩病患者を療養所に隔離・強制収容させて「県内から癩を無くそう」という目的で行われた日本の社会運動である。医師の光田健輔や各都道府県が主導。https://bit.ly/2WkM72f

5 伊波敏男『花に逢はん』付論２ p328-343

6 ハンセン病強制隔離政策に果たし各界の役割と責任 https://bit.ly/2OpkEZJ　https://bit.ly/2XmoFSN

7 日本カトリック司教団ハンセン病に関わる謝罪声明を発表 https://bit.ly/2qlfVA4　その他 https://bit.ly/2XmoFSN

8 小田部胤明前掲p148　10 年は準備期間である。

9 小田部胤明前掲p121　啓示を受けたようである。

10 自然のなかで最も弱いものである。だが、それは考える葦である。彼をおしつぶすために、宇宙全体が武装するには及ばない。蒸気や一適の水でも彼を殺すのに十分である。だが、たとい宇宙が彼をおしつぶしても、人間は彼を殺すよりも尊いだろう。なぜなら、彼は自分が死ぬことと、宇宙の自分に対する優勢とを知っているからである。宇宙は何も知らない。だから、われわれの尊厳のすべては、考えることのなかにある。世界の名著『パスカル』由木・前田訳中央公論社 p204

11 小田部胤明前掲p178　隔離の現実を前提の呼びかけであり、19 世紀の医学と宗教の限界である。

12 岩手県立美術館の解説 https://bit.ly/2WZ6FO5

13 逆の場合がロダンの「カレーの市民」の像である。市から自己犠牲に向かう英雄的な姿を求められたが、処刑に苦悩する人々の姿を描き論争が

あった。

[14] 美しく綺麗すぎることへの反省として、小堀遠州の「綺麗さび」の茶道のヒントになったのではないかと思われる。茶道の言葉「和敬清寂」と高山右近の生き方には敬と清への比重が大きい。彼において和は平和、寂は侘びに通じ侘びは詫びに通じる。

[15] 舟越保武「巨石と花びら」筑摩書房 1982 年 p41

[16] ロダンのクローデルをモデルにした瞑想という作品に似ている。舟越のロダンへの挑戦ではないか。https://bit.ly/2pV07Ue

[17] ルネサンス初期に活躍した彫刻家ドナテルロの晩年とされる作品にマグダラのマリアの像がある。通常このテーマで描かれるのは美しい長い髪を携えた若い女性で表現されているが、ドナテルロが彫刻したものは髪のもつれてやせ細った老婆の姿であった。初めて見ると正直恐ろしく近づきがたい彫刻である。しかし、我慢してそばにいるとその描写を含めた造形力に驚かされ、存在感の強さが忘れられないものとなる。これから華やかに全盛期を迎えるフィレンツェの社会の動きとは逆行するような老婆の作品に信仰とはこのように壮絶なものであること伝えたかったのではないか。彼は神の恵みを受け洞窟の中で美しい姿でいるのではなく物乞いが手をあわせたような貧しい姿に作った。これは見た目の美しさを超えたものを表現したかったからだと思われる。これから繁栄を誇るこの時代に忘れてはいけないものとしてこの彫刻を制作したとしか思われない。想像を巡らして思考しながら作品と対話し時間を過ごすことによって初めてその人の中で信仰と美術が一つのものとして目の前に現れてくる。学生や生徒たちに芸術家がどのような気持ちで制作しているか、芸術作品が見る人に訴えかけてくるかを伝えなければならない。そのために宗教への偏見を取り払い、信仰が身近なものであることを知る機会としなければならない。それでこそ人生の糧となる芸術と言うものではないか。https://bit.ly/2pV07Ue

[18] 舟越前掲 p63-64

[19] ヨハネ福音書 20 章 24 節から 29 節　イエスの傷口に手を入れるという触覚による存在の把握が出てくる。粘土の柔らかいところに触れるのである。輸送者によればダミアン像は意外に重量があり重い。身体を傾けているので重心を下にしてバランスを取るためであるが、存在の重さのように思われる。

[20] 舟越前掲 p60 では小田部の本も『救癩の使徒ダミアン神父』の題名のものを読んでいる。

[21] 小田部前掲 p230　スティーブンソンの批判が掲載。G・グリーン［キリスト教のパラドックス］J.ロゲンドルフ『現代思潮とカトリシズム』創文社 p219 1959 年

[22] マルコ福音書 15 章 34 節詩編 22 の 2 節プラトン『国家』第 2 巻 360 節義人から良さを何一つ取り除くこと無く、その良き外観をすべて奪い、最大の不正を犯したという評判を立てられる。このようにして迫害が加えられても死に至るまで正しさを守ることができるだろうか。人間がいかに外観にとらえられ判断を誤ると言うことが示されている。それでも正義を守らなければいけないのである。

[23] 新田さやか前掲　p64　2019 年立教大学

[24] 「単語が差別語なのではなく、癩病患者が差別されたのである」と田川は批判している。新約聖書 1 作品社 2008 年 p166　重い皮膚病をらい病と言ったように見える。今日、聖書の記述からハンセン病患者を差別しようと思うだろうか。

[25] 小田部前掲 p112　ルカ福音書（16 章 19〜31 節)にもラザロの名前が出てくるが、これは金持ちと貧乏人との暮らしの比較である。

[26] ヨハネ福音書 12 章 35－36 節

[27] ヨハネ福音書 9 章 1－41 節病は人の罪ではない。

[28] リチャード・スチュワート「ダミアン神父物語」サンパウロ 2005 年 p197

[29] 『多様なハンセン病者を可視化する－らい予防法廃止後の映画『愛する』今井瞳良 https://bit.ly/2qyIxFT

[30] ウィキペディア　ハンナ・リデル参照

[31] 小笠原嘉祐「リデル、ライト両女史とハンセン病救済活動」『ハンセン病講義』現代書館 2013 年 p160-189

[32] 岩田澄江『ブナの森へ』神谷美恵子に関する章

[33] 患者への気のお毒と言う言葉や人権侵害ではなく「国辱」即ち恥であると言っている。医者の目線で患者の人格ではなく医療の対象物を見て、恥の文化と国家の立場でものを考えることが分かる。

[34] 北条民雄の評価が一つではなく、施設の内と外、施設の中でも分かれることを教えられた。